

日本の伝統・文化を継承する若者たち

明日への扉

Door to Tomorrow



Takeshi Suzukawa

1987年山口県生まれ。江戸時代から続く京都の老舗「日吉屋」の五代目当主・西堀耕太郎氏に師事。宝鏡寺の門前に位置する工房で研鑽を積んでいる。



和傘(わがさ)

平安時代に中国から伝わった傘が、開閉できるように改良されるなど独自の進化を遂げ、江戸時代中期から雨具として使われ始めた。蛇の目傘や番傘の他、舞踊に使われる舞傘や茶事用の野点傘などがある。

和傘職人

鈴木剛司氏

いにしえの都で、
日本文化の象徴に挑む。

お出掛け用の蛇の目傘や日常使いの番傘など、幾つもの種類を持つ和傘。江戸時代から雨具として用いられた和傘は、伝統行事や茶事に欠かせない日本文化の象徴として、今も重要な役割を果たしている。

鈴木剛司さんは、京都に唯一残る和傘製造の老舗で修業に励む、若き職人。ものづくりの仕事がしたいという以前から抱いていた夢を果たすため、憧れの古都にやって来た。

きっかけは？

鈴木「高校を卒業して地元の山口で大工になったものの、思っていたような仕事ができなかつたんです。どうしても職人としての道を極めたくて、伝統の技が息づくこの世界に飛び込みました」

開いた姿はもちろん、閉じた姿も優雅。それが和傘の魅力だが、その美しさ

は全て手業で生み出す。

傘の骨格となり、多いときには七十本を数える骨は、二本の竹を骨の数だけ均等に割ることで行く。ちなみに、洋傘の骨は通常八本しかない。

割った通りの順に、竹を「ろくろ」という部品につなぎ合わせると、次は和紙張り。傘の形にした骨に切り分けた和紙を、円を描くように一枚ずつ張る。その作業は、ほんの少しの誤差も許されない。わずかなゆがみが結果として大きなズレにつながるからだ。

和紙は気温や湿度の影響を受けやすく、また、一度のりを施すとやり直しがきかないので、その扱いには研ぎ澄まされた勘が求められる。

無事に和紙を張り終えても気を抜くことはできない。それは、張り終えた何十カ所にもおよぶ和紙に折り目を付けるからだ。全神経を注ぎ、しっかりと和紙を折り、傘を閉じてゆく。すると、そのシルエットは元の一本の竹のように

優美な姿になる。そして、開くと花が咲いたように真円が広がり、数十本の骨が繊細な幾何学模様を織りなす。

今後の抱負は？

鈴木「自然素材の竹や和紙に同じ物は一つとして無く、それぞれクセが異なります。その違いを見極め、竹や和紙にこちらの言うことを聞かせて、より緻密なものづくりをすることが永遠の課題です」

時代の流れの中で、この国ならではの美意識を持つ工芸品へと進化した和傘。その美しさを生み出す職人の志こそが無くしてはならない日本の美だ。明日への扉を開け、また一歩、夢に近づく。

※2010年1月取材。掲載内容は取材当時のものです。

MORE!!
和傘づくりに全身全霊を打ち込む姿を動画でご紹介しています。ぜひご覧ください。

日本の伝統・文化を継承する若者たちを紹介する映像ドキュメンタリー「明日への扉」をぜひご覧ください。

MOVIE
WebやTVなどでお楽しみいただけます。

Web版
パソコンやタブレットでもご覧になれます。本紙掲載以外に、多数の若者たちをご紹介します。

アットホーム明日への扉



TV番組
ディスカバリーチャンネル(CS) 冠番組
「アットホーム presents 明日への扉」放映中
毎週金曜日 22:53~23:00



ビジョン
ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中

NEW!!
最新号のご案内

No.076 / 石見神楽 衣裳刺繍職人 大畑 公人氏